

秋田県立大学 生物資源科学部 准教授 **櫻井 健二氏 (高校38期)**



1987年 一浪して、明治大学農学部農学科に入学  
1991年 東京農工大学大学院農学研究科(修士課程)に進学  
1993年 東京農工大学大学院連合農学研究科(博士課程)に進学。在学中に米国・コーネル大学に訪問研究員として留学  
1998年 二年間の留年を経て、東京農工大学大学院連合農学研究科(博士課程)を修了、博士(農学)取得  
1999年 一年間のアルバイト生活を経て、秋田県立大学生物資源科学部の助手となり、現在は准教授。

▼自己紹介▼

秋田県立大学1)で准教授をしています。専門分野は園芸育種学です。果物や野菜の新品種育成に関する研究を行っています。具体的には、「リンゴ自家不和合性の機構解明」などの基礎研究、「イオンビーム照射による果樹の新規突然変異育種法の開発」などの応用研究、さらに地域貢献として「あきた郷土作物研究会2)」の活動を行っています。また、学生生活の支援として、学生サークル竿燈会3)の顧問を務めたり、国際交流事業として海外留学生の受け入れや派遣などを行っています。

- 1) 秋田県立大学: <http://www.akita-pu.ac.jp/index.htm>
- 2) あきた郷土作物研究会: <https://www.akikyo.net/>
- 3) 秋田県立大学竿燈会: <http://www.akita-pu.ac.jp/gakusei/kantoukai/>



▼高校時代▼

立高へはギリギリの合格だったため、勉強面で引け目を持ちながらの高校生活のスタート。中学校の一二を争う秀才が集うクラスメートにビビっていましたが、普通の同級生ばかりでした(当然ですが・笑)。勉強以外の行事(合唱祭や立高祭など)は自分の肌にとっても合っていました。与えられたものをこなすのではなく、自分たちで創りあげていく部分が多くあり、同級生と議論したり、創造力を駆り立てられたり、充実していました。当時は当たり前のようにやっていたことが、恵まれた環境だったと思います。一人ではできないことが、大勢の力が集まることで、1+1が2ではなく、3にも、4にも、10にもなる経験ができました。充実した高校生活は3年生まで続き、気がつくと受験シーズンを迎え、大学進学の意味を考えていました。立高生であれば大学進学が普通であり、進学しない方が特別な感じでした。ただ、この『普通』に疑問を持ちました。将来、何になりたいのか、何をしたいのかというイメージはありませんでしたが、いま、何が好きなのか、どんなことをやりたいのかを考えました。教科では「生物」が好きでした。生き物、特に植物の現象や遺伝子に興味があり、それに関わる研究がしたいと漠然と考えていました。研究をやるには指導者や施設が必要であると思い、大学進学の道を選びました。

高校時代に同級生と将来のイメージ像などを語り合ったことがあります。その当時の将来のイメージは三十歳までにはその後の進む道を決めて、その道に進進し、いま以上に瞳を輝かせていたいと思っていました。実際には、三十歳では未だ博士課程の学生だったので、イメージどおりにはなりませんでしたね(笑)。

▼これからの「選択」のために▼

【選択は自分で決める】

これから様々な場面で「選択」を迫られると思います。当たり前のようですが、その「選択」は自分自身で決めてください。大きな「選択」では、親の意向や先生のアドバイスに左右されてしまうことがあります。どのような「選択」をしても、思っていたとおりにいかないことがあります。そんな壁にぶつかったとき、自身で「選択」を決めていないと、他人のせいにして、その壁から逃げてしまいたくなります。でも、自分で決めた「選択」であれば、壁を乗り越えられるはずですよ。

【Better な道からBest な道に変える】

Bestな道を最初から進められるのは極々限られた人だと思います。そのため、どこかで妥協をしながら、そのときのBetterな道に進むことが多いと思います。肝心なことは進み始めてからです。妥協したことを気にしていたのでは一向に進歩はありません。始めはBetterな道だったとしても、進みながらその道がBestな道にしていければいいのです。進み始めてからが重要です。

【行動基準はすべて己の経験】

行動の根源にはその人の経験が基準になっています。そのため、経験したことがないときの判断は迷います。いままでの似たような経験などを元に判断するはずですよ。そのため、多くの経験を重ねることは、判断に迷うことが少なくなります。この経験は、読書や他人からの話などの疑似体験も含まれます。様々な経験を積み重ねて、たくさんの引き出しを持ち合わせて欲しいです。

▼最後に▼

現職の秋田県立大学には未だ立高からの入学生がいません。東京からすれば秋田は遠い未開の地に感じるかも知れません。雪国での生活にも不安はあるかと思いますが。でも、偏差値では計り知れない、教職員の人望や施設の充実は保証します。人生90年、その内4年間を秋田で過ごしてみませんか。そして、立高生が入学した暁には、紫芳会秋田支部会の設立へ動きたいと思います！



竿燈まつりでの演技



カセサート大学(タイ)への短期留学の引率(後方右側・筆者)



卒業30周年記念同窓会(16年3月)